

短歌における「病」
—歌を通して歌人が伝えたかったこと—

宮崎学園短期大学 現代ビジネス科

窪田 麗未

目 次

I. はじめに

II. 研究目的

III. 考察した短歌

1) 斎藤茂吉

2) 若山牧水

3) 上田三四二

4) 窪田空穂

5) 笹井宏之

6) 俵 万智

7) 伊藤左千夫

8) 岡本かの子

9) 『26 人目のがんサバイバー あの風プロジェクト
黒い雲と白い雲の境目にグレーではない光が見える』
収載の句

IV. 考 察

V. おわりにー今後の展望

参考文献・ウェブサイト

短歌における「病」

一歌を通して歌人が伝えたかったこと

宮崎学園短期大学 現代ビジネス科2年

窪田 麗未

I. はじめに

筆者は、短歌をよく詠み、メディア（テレビ番組）で取り上げられたこともある。しかし、特定のテーマを持ったことがない。メディカル秘書コースで学んでいるが、特に「病」について詠んだこともなかった。

医療事務を学ぶようになって、「病」について考える機会が増え、興味を持つようになった。「病」をキーワードにみていくと、「病」を詠んだ歌が意外に多いことが分かった。「病」の歌を詠む人たちは何を思い、何を伝えたかったのかを純粋に知りたいと思った。

また、短歌を通して、歌人たちは思いを伝えたい人がいたのか、誰のために言葉を残しているのか、考えたいと思う。

II. 研究目的

筆者は、現代ビジネス科メディカル秘書コースに在籍しており、病について考え、学ぶ機会が増えた。本研究では、短歌を通して多様な角度から読み、病について考察することを主な目的とする。

この目的を達成するために、以下の視点で短歌を解説することとした。

- ・時代背景
- ・病気の種類（重症度）
- ・病気に対する考えかた（疾病観）

の3点である。

使用した媒体（テキスト）は以下のとおりである。

- ・インターネット
- ・関連書籍

III. 考察した短歌

解説した短歌をいくつかピックアップしながら、研究の結果を報告する。

1) 斎藤茂吉

1人目は、斎藤茂吉である。

彼は、近代短歌の最高峰に位置する歌人で、精神科医でもあった人物である。

慌ただしく階段に降りて来たりしが何のために降りて来しか分からず

人間は成人に達すると、1日10万個ともいわれる脳細胞が減少するといわれている。物忘れとも捉えられるし認知症の症状にも捉えることができる。慌ただしいというところから、急いで下に降りてきていたことが分かる。慌ただしいということは何か大切なことや急ぎの用事であったことも伺える。大事なことも次の瞬間には忘れてしまう、記憶の儚さを歌っているといえる。

2) 若山牧水

2人目は若山牧水である。

若山は戦前日本の歌人である。明治45年4月13日、歌の友、石川啄木は死去した。その前日に牧水は雑誌のことで啄木を訪ねた。啄木は病床に臥しており、枕元にあった薬箱を示し、「この薬を飲めば病気は治るが金がない。貸してくれないか」と頼まれるも、牧水自身も金はなく、友を訪ね歩いたが金はできなかった。

啄木の家に戻ると、机の上に啄木の死後出版された歌集『悲しき玩具』の原稿があったので、それを東雲堂書店にもっていき20円を借りて啄木に渡した。啄木は涙して喜んだという。

次の日、啄木危篤との知らせを受け、急いでいくと奇跡的にも啄木は目を開き、薬のこと、雑誌のことを話したが、再び危篤状態となった。牧水は医者を迎えに走り、帰ってみると啄木の枕元にいるはずの啄木の長女京子がいない。

牧水が落ちている桜の花でままごとをしていた京子を啄木のところに連れてきた時には、既に息を引き取っていた。

初夏の曇りの底に桜咲き居りおとろへはてて君死にけり

友人である石川啄木が亡くなったことを詠んだ歌である。桜はまだ散り残っているけれども初夏のようだ。啄木は4月13日が命日で啄木27歳の頃であった。死因は結核で、父、妻とともに1歳年上の友人、若山牧水が死を看取った。自分をおいて死にゆく者の悲しみや無念さが「桜」の儚さに重なり、悲しみがよく伝わってくる。死にゆく友を看取ることへの切なさを受容を感じた。

午前9時やや晴れそむるはつ夏のくもれる朝に眼を瞑（と）じてけり

句中の「そむる」は、深く感じる、心に深くしみいる、という意で用いられている。午前9時に啄木が息を引き取り晴れを深く感じる初夏なのに友が亡くなった朝は曇りで心も穏やかではられない様子を感じた。

病みそめて今年も春はさくら咲きながめつつ君の死にゆきにけり

啄木の死因は肺結核。妻と母も相次いで病に侵されていた。病を抱えながら今年も春は桜が咲き、眺めながら君は死んでしまったな。毎年桜が咲く季節に友が亡くなったことを思い出してしまうのではないか。

病みれば 世のはかなさを とりあつめ 追わるるがごと 歌につづりぬ

解釈：病気になれば世の中の儂いことを取り集めて追われるように歌につづった。病気にかかったことで自分にはもう先がないのだと時間に追われるように歌を作った。病気を患ったことで世の儂さをより実感している。「追わるるがごと」でも分かるように、作者は自分の命が残り少ないことを自覚しており、言葉を残すことをやめないところが心に残った

3) 上田三四二

3人目は、上田三四二である。

結核を専門とする内科医として、国立京都療養所や国立療養所東京病院に勤務していた人物である。仏教の死生観を追求した歌人に傾倒した。『短歌一生』で述べた「短歌は日本語の底荷だと思っている」という文章が有名であり、「歌は本来憎しみの声でなく、やや口籠る言葉であるけれども、愛の声であり、怨念ではなく、浄念である」と唱えた。

彼は医師であったが、本人も前立腺癌や大腸癌に苦しんだ生涯だった。

腹水の腹を診て部屋をいづるとき白髪のは片手にをがむ

この患者はがん、心不全、腎不全、肝硬変、ウイルス性肝炎、膵炎(すいえん)、結核性腹膜炎のいずれかであったようだ。拝むから生きたいという思いを感じる。また診てもらえたことの感謝の思いのようなものを感じた。

4) 窪田空穂

4人目は、窪田空穂である。

日本の歌人であり、国文学者、日本芸術院会員でもあった人物である。浪漫傾向から自然主義文学に影響を受け、内省的な心情の機微を詠んだ。古典の評釈でも功績が大きい。

最終の息するときまで生きむかな生きたしと人は思ふべきなり

長寿歌人でもあった、空穂晩年の歌である。このようにあるべきと思う人生の最終の姿を詠んでいる。

命ある最後の日まで生きたいと思う人生であるべきだ。生きたいと最後の瞬間まで人は思うべきであり、最後のあがきのようにも感じるし、希望を持ち続けて死を受け入れていく、命の尊さを感じた。

5) 笹井宏之

5人目は、笹井宏之である。

1982年に生まれ、有田小、有田中から武雄高に進学、自律神経に不調が出はじめ、療養生活の中で短歌を紡いだ人物である。以下のような重度の身体表現性障害を背負っていた。

身体表現性障害：痛みや吐き気、痺れなどの自覚的な身体症状があり、日常生活を妨げられているものの、それを説明するような一般の身体疾患、何らかの薬物の影響、他の精神疾患などが認められず、むしろ心理社会的要因によって説明される障害である。

心理社会的要因：ライフイベント、生活の中でのストレス要因、性格傾向など。

笹井の視点は近代短歌が志向した「私語り」ではなく、「あなた」との関係性に置かれている。日常的話し言葉と平仮名の多用、緩い定型意識、特定の視点の不在、短歌的「私」の希薄化、薄く淡い抒情(じょじょう)が挙げられる。

えーえんとくちからえーえんとくちから永遠を解く力を下さい

解釈：「永遠→えいえん→えーえん」という言葉遊びの短歌で、えーえんは泣き声とも捉えられる。

永遠を解く力とは何か。ずっと続く闘病生活を受け入れるとともに、永遠を解く力が欲しいという願いを感じる。視点が「私語り」ではなく、「あなた」との関係性に置かれてることが特徴的である。

集めてはしかたないねとつぶやいて 燃やす林間学校だより

『林間学校だより』の弾み、わくわく感と『しかたない』というあきらめが読み取れる。学校のみennaと一緒にすることはできない。つぶやき、独り言、自分に言い聞かせている。

6) 俵万智

6人目は俵万智である。

俵万智は日本の歌人、エッセイストである。結社「心の花」に所属している。父は希土類磁石研究者の俵好夫である。

放射線からだに降らすこの春の白湯と桜の日々いつくしむ

悪性リンパ腫の治療をしていた頃につくった一首である。病気ではあるが、いつくしむ心を忘れない綺麗な歌といえる。病気になって自分を支えていたのはこの体なのだと愛おしい気持ちを歌っている。白湯と桜という春の何気ない日常に放射線というインパクトのある言葉が印象に残る。

7) 伊藤左千夫

7人目は、伊藤左千夫である。

伊藤左千夫は日本の歌人、小説家で、明治期に活躍した人物である。

世の中に 光も立てず 星屑の 落ちては消ゆる あはれ星屑

解釈：世の中には光もしない星屑があつて落ちて消えていく、星屑の哀れなことよ命を星に例えている。「光も立てず」は人から注目されずに終わる命があるという意味であり、落ちては消える哀れなものであるが命に対して愛情をもって歌っている

8) 岡本かの子

8人目は、岡本かの子である。

岡本かの子は、日本の大正・昭和期の小説家、歌人、仏教研究家だった人物である。

桜ばな いのち一ぱいに 咲くからに 生命をかけて わが眺めたり

解釈：桜の花が命いっぱい咲くから、命をかけて私も眺める
生命の宿る桜を自分も命をかけて眺めている。もう先は長くない、満開に咲く桜が散ることで命を表現していると感じた。

9) 『26 人目のがんサバイバー あの風プロジェクト 黒い雲と白い雲の境目にグレーではない光が見える』 掲載の句

最後に、『26 人目のがんサバイバー あの風プロジェクト 黒い雲と白い雲の境目にグレーではない光が見える』に掲載された句のうち、2 首を考察する。闘病の不安のなか、専門書や生々しい体験記を読むのが辛いとき、短歌は「31 字のお守り」としてそっと心に寄り添ってくれる。「あの風プロジェクト」は、がん当事者の「闘病の不安に寄り添う、女性がんサバイバーによる短歌集を出版したい」という思いから生まれた。

短歌集を出版し、完成した本をサバイバーや団体、病院へ無料で届けるためのクラウドファンディングはたちまち話題となり、開始から 12 時間で 100% 達成、その 3 日後にネクストゴールも達成した。

掲載された句のポイントは以下の 3 点である。

- ・治療中や体力がない時でも読みやすい、31 字の短歌であること。
- ・闘病中の負担にならない、軽く・開きやすい仕様であること。
- ・直感に寄り添う優しいイラスト、人気イラストレーター・西淑のカラーイラストが多く盛りこまれていること。

またがんと生きる私に十字架を差し込むごとく天窓の陽は

筆者は十字架とは手術跡、生きる上での背負っていかなければならない十字架という二重の意味があるのではないかと考えた。また、天窓の陽とは外の世界を表しており、がんが再発しても幾度でも愛を貫く逞しさを歌っていると思う。

冬瓜（とうがん）がとろり澄みゆく瞬間を見逃さないこと生きてゆくこと

冬瓜はウリ科の野菜で約 95% が水分である。見逃さないこと生きていくことと畳みかけて「こと」を繰り返すことで生きるという言葉がより強調されているように感じた。とろりという、ゆったりとした瞬間を見逃さないことが生きることを実感できる瞬間なのではないだろうか。

このプロジェクトの特徴は、「自分で書きたい、ではなく、書きましようと言われて書いた」ことにある。このことから、筆者は、当事者が「心の整理をし、見つめなおし、自分のために言葉にすること」がこのプロジェクトの意味だと考えた。

IV. 考察

病の短歌を詠む人たちは生きたいと願っている、または他者に対して生きてほしいと

思っている。そのため生命力のある歌が多いと感じた。どんな状況であれ命を尊び、大切にしている。どのような人でも命を慈しんでいるとは思いますが、病を抱えて生きている人の言葉はより人々の胸に響く。自分が生きた証を言葉で残そうとしている、または、伝えたい、知ってほしい誰かがいるように感じる。それを汲み取ろうと意識せずともこちら側に伝えているところに魅力を感じた。

また、「病＝死」に直結しているため、より深く読み込むことができる。しかし、筆者が考えたことは「病＝生」でもあるのではないかということである。短歌には生命力を感じるものが多い。死とは残酷なものであるがそれと同時に美しいものであるようにも感じる。それは「生」というものに対しての慈しみをより強く感じているからなのではないだろうか。

そのため、「病」という題材をテーマに研究する上で「生きる」ということにも焦点を当てて研究をしていかなければならないと考えるようになった。

V. おわりにー今後の展望

筆者は、今後、「病＝生」に焦点を当てて研究を進めていきたいと考えている。同じ短歌でも見方や考え方を変えてみると感じ方や言葉の汲み取り方が変わってくる。研究の過程で、まずは生きるという生命力に目を向けて短歌を詠んでいきたいと考えるようになった。

病は死を連想させるものや自分の人生における分岐点になりうるという考えが筆者の中に強くある。それは、生きるという命の尊さをより実感してしまうからなのではないだろうか。それが自分であっても他者であっても、いつの時代であっても変わらない思いであるのだと考える。

この考えをこれからの研究で深めていきたいと思う。

【参考文献・ウェブサイト】

- ・「万葉集」と斎藤茂吉「死にたまふ母」(「赤光」)の悲しき挽歌 | 歓怒(かんど) (note.com)
2024年10月1日取得
- ・今月の短歌～窪田空穂の歌の魅力をご紹介します～ | 窪田空穂記念館
<https://matsu-haku.com/kubota/archives/1123>、2024年9月2日取得
- ・「酔流亭日常」<https://suyiryutei.exblog.jp/2517095/>、2024年10月10日取得
- ・延岡観光協会オフィシャルサイト「若山牧水」
<https://nobekan.jp/history/castle/%E8%8B%A5%E5%B1%B1%E7%89%A7%E6%B0%B4/>

- ・ 上田三四二 Wikipedia
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8A%E7%94%B0%E4%B8%89%E5%9B%9B%E4%BA%8C>
 2024年10月1日取得
- ・ 株式会社左右社「闘病の不安に寄り添う、病院のベッドで読める短歌集が刊行／2月4日からAmazon予約開始」プレスリリース
prtimes.jp 2024年10月10日取得
- ・ 好書好日「俵万智さん「アボカドの種」3年ぶり歌集 揺れる心、つむぐ時間も歌なんだ」
<https://book.asahi.com/article/15108010> 2024年10月1日取得

 - ・ 小林 功「歌人にみる人間の一生」モダンメディア、栄研化学株式会社
https://www.eiken.co.jp/modern_media/backnumber/miscellaneous/546/
 2024年10月10日取得
- ・ 笹井宏之『えーえんとくちから』ちくま文庫 | 穂村 弘
- ・ 笹井宏之 - Wikipedia
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AC%B9%E4%BA%95%E5%AE%8F%E4%B9%8B>
 2024年10月1日取得
- ・ 書肆侃侃房「新鋭短歌シリーズ 笹井宏之」
<http://www.shintanka.com/shin-ei/kajin/sasai-hiroyuki>
 2024年10月10日取得
- ・ 短歌の教科書 | 短歌の作り方・有名短歌の解説サイト「【儂さを詠った短歌&和歌 20選】人の命や時の移り変わり…心に響く短歌集を紹介」
<https://tanka-textbook.com/fragility-famous/> 2024年10月10日取得
- ・ 東京新聞 TOKYO Web「そっと寄り添う一冊に がんサバイバーの女性たちが短歌集「一人じゃない」と伝えたい」
<https://www.tokyo-np.co.jp/article/95865> 2024年10月10日取得